

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第181号（2021年6月）



白井啓治

（二十）恋の心（物語）の降る里

（2009年6月14日）

『君がいて僕がいて生れて愛が育まれてふる里の風』

ふる里というのをどう定義するかによって、ふる里に対する思いや考え方が変わってくるのであるが、私は、ふる里というのを「自分が暮らしを創る、創っている里」という風に考えている。だから古里、故郷と書くよりも降る里：「心の降る里」と書き表したいと思っている。

暮らしを創る里であるから、そこには暮らす人が居て、暮らしを創るための心を降らせる人が居る。そして降り落ちる心の数だけ暮らしの物語がある。物語、それは劇（ドラマ）。劇とは劇しい人の心模様：葛藤である。葛藤とは洞察と逡巡。もともと原始的でかつ根源的な葛藤は恋。以前より私は、恋のない里には暮らしは育まれないし、物語は生まれない。そして物語の生まれない里は滅びると言ってきた。

聾女優の小林幸枝さんと主催する朗読舞劇団のこ
とば座では、常世の国の恋物語百に挑戦し、この
雑文に絵を提供くださっている兼平さんには、舞

台の背景画として恋に葛藤する常世の国の五百相に挑戦していただいている。

ここで改めてふる里を思い考えると、恋の心の降る里こそがふる里と言えるのであらう、と確信するとともにそう断言して良いと思う。



（絵：兼平智恵子）

国府が置かれたという事だけを捉えての歴史の里と称する石岡市であるが、大切な文化としての歴史をどこかに捨ててしまつたものだから、現状の衰退はやむを得ない事ではある。歴史をさか

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 （木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

のぼり石岡の最初の廃墟とされたのは将門の乱であつた。しかし、この将門の乱の底には、将門の邪魔された恋の恨みが隠されてある。歴史の里いしおかは、そのかつては恋の降る里であつた。そんな再認識ができれば、新たな物語文化が生まれ、恋の降る里として元気と希望が再生されるのではないだらうか。

ふる里は、恋の降る里。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

地域に眠る埋もれた歴史(69) 木村 進

【5 菖蒲沢・上曾・小幡地区】(4)

5.5 薬師古道と薬師 石岡市菖蒲沢

この菖蒲沢地区に残る薬師堂は桜川市の薬王院、土浦市の東城寺、石岡市十三塚の山寺薬師(既に廃寺)と並び、筑波四面薬師の一つとして、この地域の信仰を広く集めてきました。昭和初期までは多くの参詣者で賑わっていたといいます。



弁天池と薬師堂(ここからのお堂の眺めは最高)

この昔の参拝で歩いた道が2006年秋に古道として整備された。この菖蒲沢地区から薬師堂まで

は約0.5km、またその先の竜神様など片道約1kmの登りである。急登ではあるが気持ちの良い道が続きます。一度是非訪れて欲しいところです。

5.6 石岡の奥座敷中山集落

石岡の辻のイチゴ団地のところを筑波山方面に進むと北向観音のある仏生寺地区がある。ここから山を登れば不動峠にでて、向こう側は平沢官衙、北条大池に至るのであるが、この仏生寺地区から右に曲がると中山という集落に出る。ほかに抜ける道もないので用事でもなければここを通ることはあまりない。

またこの中山地区の少し上流側には開拓団(満州帰還者)が入り開墾した中山開拓がある。



その中山集落の中央部にみごとな五葉松の木がある。(石岡市指定天然記念物)この木は小松崎邸の入り口に植えられているが、数代前の先祖が伊勢神宮に参拝したときに記念で持ち帰り植えたと言われているそうだ。横に張り出した枝は16mあるという。

中山集落を初めて訪れたが、小桜川の源流地帯で、川に沿ってひっそりとした里山が広がっていた。このあたりもまた少し散策して心に刻んでおきたい場所だった。石岡の奥座敷と呼ぶのにふさわしい雰囲気を持っていました。また、山里が美しく春の息吹も満載でした。

はらはら散る山桜もこの時期はいいですね。

訪れたのは4月の始めです。近くにギャラリー「野遊」という施設ができていました。時々ライブなども開かれているとか。お店の前は山の地形を利用した?ステージもあります。この中山部落も通り抜ける道ではないので奥まった感じですよ。

道端にはここにも二十三夜尊の石塔がおかれています。八郷地区の筑波山麓の街角にたくさん「二十三夜尊」石塔がおかれています。

川沿いに山道を少し登っていくと奥の部落に出ますが、その部落入口の山の上に上る石段があります。上に愛宕神社や熊野神社のような神社があるのだと思われました。

少し危なっかしい急な石段を登ってみました。

上には石棺のような石組みの建造物があり、その中に観音像が祀られていました。古墳から発掘さ

れる石棺のような感じがします。この内部には石の観音像が祀られて置かれていました。

この山の上一帯が神域のようです。

木の根元にはいろいろな石像がおかれています。



こんな青面金剛像と三猿が描かれた立派な庚申塔もありました。ここから部落に入る人々を監視しているのかも知れません。

海外旅行の思い出(1) 木下明男

ソ連滞在記1

私の労音時代、今から30年ほど前です。アエロフロート機で約十時間、モスクワ空港(シエレメチェボ空港)に到着。4度目のモスクワだ

が、晩秋(10月30日〜11月6日)に来たのは初めて(年末2回、夏に1回)予想に反して外はもう冬の寒さだった。今回の訪ソは、その翌年に来日する予定の「モスクワ音楽劇場バレエ団」と「民族アンサンブル・ラウルコサック」との交渉を進めるためだった。モスクワ滞在中のホテルは、ベルグラード道路を挟んでツインになった20階建ての建物。外務省の向かい側にあり、利便性の良いところでした。到着した翌日の朝、モスクワ川やアルバート通りを散策、曇交じりの雨と冷たい風にさらされ、大変寒かった。

企画交渉のことを話しても面白くないので、滞在中に感じた市民生活について触れてみたい。触れるといっても、閉ざされた社会(社会主義的統制)でもあるし、一観光者(企画交渉であつてもビザは観光)では、真の市民生活を窺う由もない。従ってツアー中に感じたままを綴る。まずお金のことから、この時期(1989年10月)1ルーブルの公式レートは250円(外貨シヨップ)だが、その時期に換金したレートは25円(旅行者)、現地についてからホテルで声を掛けられたドル換算レート(所謂闇ドル)は、100ルーブル100ドル(1ルーブル8円)・・・と、恐るべき実態であつた。(因みに現在は1ルーブル1・5円です)

市街の露店で青リリングを購入、6個2.5ルーブルで買った。ホテルのカフェでトマトジュース(2杯)を注文、僅か30カペイカ(1ルーブル1100カペイカ)で飲めた。市街スタンドレストラン(?)の昼食では、パン食べ放題とボルシチに紅茶を注文、3人前で10ルーブル

しか掛からなかった。ウクライナホテルのレストランでフルコースの昼食が5人で90ルーブル。クレムリン前の赤の広場脇にグムデパートが存在する。ウールのマフラーが1枚10ルーブル、あまりに安いのでお土産として沢山注文したら、1人3枚までしか売ってくれない。

この国、平均的な労働者の給料は300ルーブル(?)。物価は大変安い、何処の店でも長蛇の列があり中々買うことができない。プーシキン通りのある一角、いつ見てもたくさんの人々が並んでいる。何を売っている店か聞いてみた、ビールを求めているらしい。(真昼間です)ここ以外でも、其処ら中で列を目にする、どうもこの国では並ばないと物が買えないらしい。私たちの仲間がホテルでお金を盗まれた、警察が来て事情聴取しながら話してくれたこと「最近あつたことで、ある窃盗グループの手口・・・最初の二人が車の窓ガラスを外し下に置いていく。次に来た二人はその窓ガラスを持っていく・・・警察に摘発された初めの二人は、悪戯でガラスを外したと自供。次の二人は道にガラスが置いてあると危ないので持つて行った。」(落語みたいな話だが)その窃盗団はその後どうなったかわからないが、最近のモスクワは治安が悪くなっている、新聞報道でも泥棒等の犯罪記事が多数掲載されているようです。

私たちがモスクワ音楽院でヴァイオリンコンサートを鑑賞し、そのヴァイオリニストから自宅に招待を受ける。そのアパートに行ったのですが、招待したヴァイオリニストは帰宅が遅れ、私たちは階段の踊り場でワイワイと談笑していると、住人から煩いと怒られる。その場を

離れ待っていると、いきなり警察が表れた、どうも通報されたようでビックリした。事情を説明したら警察は笑いながら帰っていった、そして警察の対応の早さに感心した。市街地の横断は地下道路で渡ります、その地下道に多くのホームレスがいた。また、繁華街にあるアルバート通りでは、ジプシーと思われる子供たちが、観光客に群がり小銭を強請る光景も目に付いた。

ウラルコサツクに会うため、モスクワからオレンブルグ市（モスクワから南東に1500 km）に移動することに……。飛行機は国内線、シエレメチエボ空港（国際空港）から市内を挟んで、真逆のところにある。私たちは外国人なので、待合室も外国人専用でゆったりしていた。乗機の順番も、外国人なので一番初めに乗機、着席して暫くすると一般客が乗り込んでくる。オレンブルグからの帰り、空港内は足の踏み場もないほどの混雑、何事かと質問……。これは何時ものことで、当たり前……。しかも私たちは5人が優先で乗ったので、その分溢れ乗れなかった人がいる。申し訳ないが、この国のシステムなので……。そして、オレンブルグの空港を出ると、一面の雪景色。

つづく



茨城県護国神社

小林幸枝

3月下旬、偕楽園へ行った時、茨城県護国神社が近くにある事を私は始めて知りました。護国神社は、偕楽園近くの桜山に社殿があり、桜の名所にもなっています。

この神社には、幕末から第二次世界大戦までの茨城県出身戦没者の霊が約6万3千柱祀られているそうです。1878年の明治維新前後に亡くなった水戸藩士、約1800柱を祀るために、常磐神社の境内に建てられた「鎮靈社」を起源としています。現在ここには藤田東湖を祀る「東湖神社」があります。

日本が太平洋戦争に突入する少し前の1940年に独立の神社となり、1945年10月に内務大臣指定の護国神社となつて「茨城県護国神社」と改称され、同年11月に現在地の偕楽園の桜山に遷座されたのです。翌月の12月には、日本は太平洋戦争に突入してしまいますから、当時は戦争の色合いも濃かったのかもしれませんが。

日本の敗戦後には、この護国神社は軍国主義象徴的な施設と見なされました。

そのため、神社の在続を図るために改称を余儀なくされ、1945年8月に地名から「桜山神社」となりましたが、平和条約を締結し、日本が独立を回復すると1954年10月にもとの社名に戻されたのです。

水戸市見川一丁目2-1

新たな挑戦

3

菊地孝夫

母のため 一心に糸を通せし少年も
今や白髪のお翁

どうやらこの国は、オリンピック開催に向けてな
にがあるうと走り続けるようだ。

もはや何を言っても無駄なようである。

IOCを始めとする利権集団の意向には、到底逆
らえないようだ。国内でも、成人のうち、およそ
三割の人間がオリンピック利権のおこぼれにあず
かっている現実がある。

オリンピック終了後数カ月の間には、開催の是非
が出てくるだろう。勿論のことだが、そのときは
手遅れとなっている。

善意の聖火ランナーを利用し、反対する者には、
まるで国賊扱いをする。

そもそも、オリンピックはヒトラーの例を上げる
までもなく、昔から政治的に利用され続けてきた。
平和の祭典などと言ってはいるが、流血の事態も
しばしば起きている。これらのことは決して遠い
昔の出来事ではない。

スポーツマン総てが、善人の集まりであるかの
とき報道姿勢は、明らかに間違っている。

『本当のような嘘話』を連日まき散らし続けてい
る、マスコミ関係もいずれ厳しく糾弾されるべき
だろう。

全くふざけたことに、IOC会長は、開催の
為には多少の犠牲もやむをえないとまで発言している。
たかだか数千人のスポーツ選手の為に一億からの
国民を犠牲にしてもよいのか？

かかるたわけた発言を黙認しているこの国の指導者層に対して、いまだ支持する国民が多数いることには啞然とするばかりだ。

IOC委員が、

「アルマゲドン（大滅亡）以外には大会中止はあり得ない」

と、まで発言している。このような低能たちを、国税を費やしてまで五千人も招待する意義がどこにあるのだ？

お偉いさんたちのポケットマネーで御招待すべきであろう。

大会関係者には、現時点で全く足りていないワクチンを、年齢を問わず優先的に接種するという。

このような姿勢が、果たして正しいといえるのだろうか？

今月号からは、新しい連載を始めていく予定だったが、現在進行している、あまりにも馬鹿げた施策に憤りを抑えきれずに、思わずこのような文章を書いてしまった。

すでに五月も終わろうとしているのに、いまだに去年と同じ対応に終始している。ウイルスの自然消滅を待っている、日和見主義的態度としか思えない。行財政改革とか言って、自然科学全般に対する基礎研究に、政府の助成を、ろくに行ってこなかったツケが、今になってこうした遅れに現れていると言える。

環境汚染や、地球温暖化に対しても、あれこれしようもない屁理屈をこねては、常に経済優先の考え方しかしては来なかった。その結果、世界の潮

流に乗り遅れてこの分野では、ご立派な二流国にまで成り下がってしまうという甚だ情けないことになってしまっている。



“てつ”という女

伊東弓子

毎日三十分でも確りと古文書に向かい合うと、決心した日は遠くなった。しかし、今日は久し振りに予習をしている。市内の或る寺の人別宗門改帳を開いている。



長男のことは倅と書き、次は二男（又は次男）三男と書く。親は、父・母・祖父・祖母は最後に

書き、馬も必ず記入する。持高や家族の年令、構成、馬を持つているか等で、状況や生活が浮かんでくる。名前を読んでいると、姿形が目に入り、語りかけたか思いになる。最後に部落の合計がしるされる。



と、しめくくる。

私は今回“てつ”という女の家族に目を引かれた。持高は極々少なく、子供は多勢いてまだまだ幼い。舅はすでに山仕事の事故で亡くなったという。田は坂を下った所に少しあるとか、畑が家の近くにある。夫とてつ、姑と五人の子供の暮らしは大変なことだったろう。私は、この人別帳を眺めながら、あれこれ想像し始めた。

夫はよく働く人だったが、女、老女を入れて働 き手は三人。暮らしは他に比べられない程に貧しかった。畑の先に森があり、てつには、そこへ続

くこの道は、何故か夢をもたせてくれるように思えた。何時の日か行ってみようと、畑仕事の途中で眺めてみたり、田への行き帰りに思いを寄せながらいた。名前の感じからも強い人という印象だ。嫁にきた頃の遠い日が懐かしい。よく働いてきた。丈夫な体を貰ったことを有難く思う。と、常に思うてつだった。

毎日の苦しい生活の中に楽しいことがあった。姑と子供達と観音様の縁日に出かけることだった。畑道、山道、田の畔と続くは続くよく歩いたが姑はよく言った。

「宝があつと、たらふく食べろ」

胡頹子（グミ）、木苺をよく手で採った。すかんぼもよく噛むと口の中に酸っぱい汁が広がって腹のたしになる。春がすぎ、夏も秋も楽しみはいっぱいだ。姑の大切な銭が七人の賽銭の代表となつてくれる。みなで尤もらしくお参りする。店が並んでいても買う金はない。

「よく見とけ、何があつか。次の年にはこれを買うぞと心にきめろ」

と、子供らを励まし賑わいの中を後にした。帰りは、木の芽草の芽を持てるだけ摘んで夜のため、明日のための足しにした。

「日頃よく働いてんだ。丈夫な体が有難てえ。そのお礼にお参りに行くだから、野良休んでも罰はあたるめいよ・・・」

姑の明るさや前向きの生活姿勢が、てつの心を解かしてくれた。

苦しさの中の楽しい日々が流れていって、男の子達は生意気な年頃を向かえ、てつを悩ませることが多くなった。その頃、夫は死んだ。姑も、てつも力を落とし、つらい日が続いた。暫（しばらく）

く気にしていなかったあの山道を思うことが多くなった。明るい希望につながる道か、恐ろしい場所か、一人思いあぐね抱えた不安の玉が大きくなっていくのを感じた。

その中、耳に入ったことは、山奥の方で下の部落のものが首括りして死んだ、とか、漁師の息子が向こう場の女のとこへ行くのに舟盗んで出かけ、途中で流されたが、その後どうしたか

世間の話しが聞こえるようになると、縁日に行く気も起きず、人に会うことすら、さけたい気持ちになった。女の子達に縁日参りに行かせた次の日、胸騒ぎがして今まで考えてもみなかったことを実行した。何かに引かれるように山道を行った。ちよつとした窪みが気になり足が止まっていた。

ぼろむしろがある。怖い物を見るかのように穴だらけの筵を持ち上げてみた。そこには木の枝を組み合わせ藤蔓で編んだ大きな籠があつて、持ち手もつけてある。誰かが仕事途中で措いた物だろう・・・。見てはまずかったか。急いで筵を被せた。今日はここで帰ろう。行つてはいけなかったか。見てはいけなかったか。口にも出来ずにいた。気になると聞こえてくる事も増える。

“若い奴らが集まる所があるらしい。おめえんとこの息子ら大丈夫か、悪にでも纏まんなきやいいけどな”

何か意味有り気に響いてきた。それから何日か経って、

“あの山の中で餓鬼らが、いざこざしてるとよ”という話しをしてくれた人がいた。姑は十三夜に出かけて留守。てつは思い切つてあの細い道を行こうと決心し家を出た。月の明かりだけが頼り。誰か後から付いてこないか。両脇の茂みから魔物

でも出てきそうだし、行く先に何がまっているのか？ 高い木立が巨人にも見え、襲われそうだ。不安と恐怖の塊りとなっていたが、ある意地がてつを歩かせていた。偶に夜鳴きするものの声、

鳥の羽ばたきも不気味だった。前に来た窪みの辺りまで来ると突然聞こえた怒鳴り声、若い男達の声だ。罵り合う叫び声、恐ろしくそれ以上は足が出なかった。てつの直感、多勢に囲まれているのは次男に違いないと思うと、余計につらい。まもなく静まり返ってしまった。てつは暫くそこでじつと息を潜めていた。何も聞こえない、静まり返ったままだ。どの位経つたか恐る恐る前へ進んできた。

“ちきしょう”という声が出た。

悔しまぎれにさけんでいる姿が見えてくるようだ。それが次男の声であると、はつきりわかった。

“ちきしょう”

悔しさを吐き出している叫びが静かな山に響いた。少したつと、次男もその場を去つて行つたらしく静かさは増した。急いで駆け寄つてみた。月明かりによく見ると、肥溜めがあつた。次男はここに落ちたんだろう、と思えば哀れさが増した。微かに揺れる肥溜めの中に十三夜の月が歪んで揺れていた。胸の苦しさに堪え、家に着いたら湯を沸かした。講から帰った姑は

“まだ帰つてこねえのか、仕様がないなあ”

と言つて、寝てしまった。てつは悲しさを口に出

来なかった。戻つてきた倅に、
“おめえは兄ちゃんなんだから守つてやつてくれ”
と、言つて床についた。疲れがいつきに眠気をさそつた。

それから夏草が出、取るまもなく延びきつてど

う仕様もない頃、倅が、

“おかあ、これ使え。運ぶのに楽だから”

と、言ってくれた物。大分前にあの森の窪みの所でぼろ筵で隠してあった物だった。木で輪をつくり動くようになっていた。

“重いのは無理だが、草運ぶのに楽だよ”

嬉しかった。姑も喜んで、

“器用だな。いつのまに作ったんだ。俺も働くぞ”

と、張り切っている。姑は、縁日参りや講から寺参りに変った。次男は姑の伴をしてくれるようになって嬉しい反面、やがては家を出ていく日もあるのだと、ふうつと思うと淋しくなる。坊さまに聞いた話で夜は盛り上がる幸せが天井まで響いた。姑が亡くなり、次男は隣村に、女の子達もそれぞれ嫁に行つて、てつはまだ嫁ももらえない倅と暮らしている。

辛かったあの道も今は明るい気持で通る道となった。あの小屋の先につながる道を上ったり下がつたりしながら行くと川に出る。そこには、漁をしている人達の生活があった。山場の暮らしとは違う人の生き方があった。孫を連れ、この楽しい道を歩く。婆さんとなつたてつは、姑との生活を思い出し、同じようなことをしている。実を摘み、草をつみ口にすると、あの頃の味が口の中をうるおしてくれる。

人が生きていくということは、この道のようなものだ。知らないで怖がつたり、喜んだり、狭い自分の暮らしだけであくせくしてきた。知ること希望が湧いたり、苦難を乗り越えたり出来ると知つたてつは、今もつともつと知りたい、もつともつと生きたいという欲が出てきた。さあ、来る月も十三夜講に行こう。

てつは豊かな生き方をした女だったろう。人別宗門改帳には、亡くなった年は書いていない。



風と共に

《理》

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「予」

あらかじめ、前もって。

私は、何かをする際には、起こりうるだろう最悪に備えて、出来る限りの事をしようと常に考えています。

大抵の人は同じ様に考え行動していると思います。勿論例外は常にありますが。

それでも、個人毎に、事前準備には違いが出ます。その差とは、

それがこの世でのヒエラルキーに多いに作用しているのではないのでしょうか。

冒頭において私は、事前準備を出来る限りと述べました。

別の誰かも同じ様に、出来る限りの事をしていきます。

ここで皆さんは思考下さい

ある事象に対して、心人が事前に準備をした時に、果たしてどんな違いが出るのでしょうか。

そうです。

経験の差、想像力の差、体力の差、環境の違い、等々。

様々な因子が、事前に準備する事に作用し、結果、その差は顕著に現れます。

身近にある分かり易い例とすれば、

母親が子供に、ハンカチ持った？傘持った？宿題入れた？

起こり得るであろう事態を事前に予測し、予言しています。

過去における自分の経験や、この子で有ればこの様な事に頓着しないだろうか、

その様な事に対し、思いやりの心で、子供には口煩いのだ、そんな事分かってるのだ、反感を買い

ながらも、外で嫌な思いをしないで済むよう、予見したりしますよね？

才能も関係して来るとは思いますが、子供の頃から多様な事に意識を向け、始まりから終わり。

原因と結果。

この様な理に、興味を持って、無意識に掘り下げて行ける人は、ある時期から知り得るのではないでしようか。

自分が人より優れた感性と、察知能力に長けている。人を導く事が出来ると。

そんな事に気が付いて、それを世の中の良い方向へと使ってくれるなら、とてもありがたいですよ。

ですが、世の中とは人生とは薄情なものです。

大袈裟かもしれませんが、2つの未来が見えて来てしまします。

自己犠牲か自己中心。

多くの知者は、後者ですよ。

これが、後にヒエラルキーの頂点とすれば、良い社会は実現されません。

コミュニティにおいての、ヒエラルキーの天辺は、少なくとも多少の自己犠牲が無ければ、

良い社会は築かれないのです。

家族、学校、会社、街、市、県、国。

様々なコミュニティの上に立っている人達には、その中にいる人達に対し、分かり易くその仕組みを理解させる、各個の役割を理解させ、効率よくかつ和気藹々とした雰囲気の中、全体が上手く回っているのか、それを管理していく必要があります。

皆様においては、日頃から当たり前の事から、思い直して頂ければ、一つ一つの後悔や、しなくても済む無駄な事、怪我だったり労力だったりを少しでも減らして行けると思います。

面倒だからと後にでは無くを念頭に。それではまた次回に。



ふるさと “風” を振り返って 兼平智恵子

当会報誌先月号、ふるさと風十五周年記念につきまして、お祝いのご寄稿を頂きました元美浦村

長 市川紀行様はじめとして、ご愛読頂いております皆様から励ましや労いのお言葉、そしてご助言を頂きました。感激致しております。有難うございました。私、個人といたしましては十五年間毎月、今月は休もうか……の連続でした。

何故か師の白井啓治代表は私に対しての文作指導は、「あなたが、感動して書けば、読んでくれる方も感動して読んでくれるはず」でした。未だに稚拙な文に悩み続けております。

今回の市川様の お母様の詩は二人の息子をもつ身として、そして二人の子残り二十九歳で逝つてしまった主人の母と懸命に育ててくれた母と、早く迎えに来てほしい（私の父）と言いながら九十八歳で夫の元へと旅立った母の事、思う事でした。日に日に老いを感じる身、熱心な風の会の皆さんと、もう少し踏ん張ってみようと、ご愛読頂いている皆さんからお力頂きました。どうぞよろしくご愛読、ご指導お願い致します。

平成十六年の初夏、石岡市商店街活性化の呼びかけに応じて「ふるさとルネサンスによるまちづくり」が企画され、石岡在住間もない日本シナリオ作家協会会員（脚本家）である白井啓治氏が実務を担当することになり、市民からの参加者の募集がありました。

当時、絵手紙で石岡の歴史を紹介していた私は、知人からの勧めもあり参加となりました。

何人かの受講者の中、打田さん、伊東さん、そして囃者である小林さんとの、顔あわせが多くなりました。打田さん、伊東さんは文作へ、小林さんは手話という特技をいかし、手話舞を軸にした劇団ことば座を立ち上げ、その舞台の背景画を担当

させて頂くようになりました。

白井先生いわく、古里とは十世にわたって口に伝えられるものの在る里である。口伝えられるものとは物語であり、物語とは未来への希望なのである。



コスモスの

花に

秋がとまった

子どもらの

笑顔

また「ふる里とは、恋の降る里であり物語の降る里」のこと、恋も物語も結末はどうあれ希望を語るものなのだから、この地をふる里と思うのであれば、恋も物語も沢山降らせなければと、小林幸枝さんと「常世の国の恋物語百」への挑戦をスタートさせたのでした。

のちほどに、この恋物語百の公演した三十余りの内、いくつかの公演の様子（公演中の写真にて）をこの会報で紹介したいと思っています。

その他、先生の一行文を、小林さんは表情豊かに手話舞で楽しませてくれました。

ここで白井先生の一行文に絵と文字を添えました。
酷暑の中 歩くのは俺一人 啓洛



橋 泉

この泉橋はJR常磐線を跨ぐ陸橋で昭和八年一月二十五日に竣工し、盛大な開通祝いが行われたそうです。

この陸橋は、慶長五年（一六〇〇）に関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は街道の整備を始め、東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道の「五街道」に次ぐ「脇街道」の一つとして水戸〜江戸間に開通した水戸街道の一部になります。

水戸方面に向かって泉橋を渡ると間もなく一里塚（江戸時代に全国の街道に一里ごとに土を高く盛り上げ樹木等植えて道しるべとした塚）、ところが水戸方面から江戸に向かうと江戸街道になると陸橋に描かれてあります。

陸橋になる前は、山王川を中心とした田畑です。

れの道で両側には、幾つかの茶店があり、常に荷車や馬方衆の溜り場となっていたそうです。そして東北方面からの玄関口として泉町見附門がおかれたところ（石岡の地名より天保年間府中町絵図Iからみると現在の泉橋の泉町交差点辺りと見られる）昭和の初期まで左右に石垣が残されていましたが惜しいことに、泉橋架設の直前、跡形もなく取り壊されてしまいました。

現在の府中公民館入口の白い門は泉町見附門を模したものだそうです。

○ もうすぐワクチン接種心勇む 智恵子

【風の談話室】 《読者投稿》

やさと暮らし (52)

さと女

ニンニクがりっぱに育ってきた。この時期、スックと伸びてくるニンニクの芽。夕食に牛肉と炒めて食べたが、柔らかく美味しかった。最近直売所でも、売っているみたいですね。ニンニクの香りがして元気出る感じ・・・。

・午後からイチゴ屋さんのお手伝い。コロナ禍の今、夫婦だけで作業する予定だったとか？いつもの仲間から、手伝うよと言う声がかかり、いつもの仲間が集まった。3月に植えたイチゴの苗が大きく育ち、ランナーが大分伸びてきた。ランナーから出た子苗を育てる苗床用プランターに、イチ

ゴ用の土を詰める作業。3時間程で何とか終わった。終了後はみんな夕食（こちらがメイン？）を頂く。窓を開け換気を良くしマスク会食だった。早くのびのびと食事がしたいですね。

・エコクラフトの日、2ヶ月前から頑張っていたノット編みの籠が、悪銭苦戦の末出来上がる。4人お揃いだ、それぞれ個性があつて面白い。初めて編み方で途中投げ出しそうだったが、編み進むうちに面白くなってきたとの感想。家族の励ましもあり今日はよい報告が出来ると喜んで帰っていた。初めての方も数人参加でお菓子入れ作りに挑戦。オリーブのママさん、いつも有難うございます。

・今日も夏日和・・・友人の茶摘みに参加した。茶畑のある場所は、中山（戦後の開拓部落跡）。くねくねした山道を恐る恐る登っていく。すると、突然に急斜面に沿った茶畑が現れる。そこからの景色は、八郷盆地が眼下に現れ、その素晴らしい事。9時集合で、20数名が参加し・・・作業前に摘み方の説明。新芽は柔らかで、3〜5枚目（一芯四葉）のやわらかい所を爪でとる。中々策にたまたまなかったがそれでも大勢での作業、昼食をはさんで2時ごろには終了。摘んだ茶葉はお茶の加工場へと、運んで行った。この茶畑は、5年前まで藪に覆われていて、今のような素晴らしい場所になるなんて想像もできなかった。有志の方たちのお陰です、お疲れさまです。

・今はお茶摘みの姿など見たことはありませんが、昔は各家庭にお茶の木があり1年分のお茶を作

っていた。先日茶摘みに参加した茶畑は、戦後引き上げてきたが山を開墾して作った畑です。その開拓部落も過疎化が進み、茶畑も雑草に覆われてしまったようです。その荒れ地を数人の者が、何年もかけて綺麗にしたらお茶の木がよみがえったのです。お茶工場も近くにはなく遠くまでもつていったようです。美味しいお茶になって帰ってくるでしょう。

・夏日和が続いている、近くに住む知人がお孫さんを連れて、我が家の水族館（？）のお魚さんを見にやって来た。お孫さんお魚さんに餌をやつて、楽しんで帰って行った。その後、季節の移り変わりを感しながらの散歩。集落内の田植えはすっかり終わった様だ。雑木林がとても美しい。アマドコロの緑と白い小さな花が、何とも美しい。暫くの間咲いていくのかな、思わず足を止めて眺めた。

・登り窯に火が入って5日目、窯の中の温度が1000度になったとの知らせで訪ねて行った。ご主人亡きあと娘さんが紫峰窯（備前焼）を守り2年に1度の割で窯たきをしている。窯の中はゴウゴウと真つ赤に燃え、高い煙突からは真つ黒い煙がモクモクと出ていた。徹夜での作業はあと5日位かかるかなとの事。ちょうど明日朝まで使う薪を運ぶというのでお手伝い。家族総出で10日以上もの徹夜の作業、火を止めて暫くしてから窯出し、どんな作品に仕上がるか楽しみです。

・いつもの散歩1キロ程歩いた所で、知人に会い野菜あるけれど持って行ってくれる・・・。ちょ

うど畑に行く途中だったようで、その畑は何時も美しく手入れされて居るところだった。青梗菜とほうれん草を抜いて持たせてくれた。両手いっぱいになったのでこのまま散歩を続ける訳にはいかず引き返すことにした。もうすぐ収穫の絹サヤ・・・支柱立てが美しい。彼女に自分で立てたのと聞いたらもちろんとの返事。見事な支柱立てだった。夕方雷がなり、大粒の雨が降った後、筑波山の方を見ると山が燃えていた。東の空には大きな虹がでていた。

・3年前の楽しかった思い出。食べて飲んで語って、まさか1年後にあの明るかったバレーボールで鍛えた元氣そのものの路子さんがいなくなるなんて・・・何とも悔しい・・・。「友人たちとまなまや（蕎麦屋）で宴会。友人は東京時代からの付き合い、こちらに転勤になっていた。私達も越してきて、再び石岡での交流が始まる。今回は彼の同僚親子4人で田舎家に泊る。その前にまんまやで宴会、久し振りなので次第に大宴会に・・・。続きは田舎家の方でと言う事で、酒瓶を抱えて移動、親と娘夫婦どんな夜になるのやら？



おすすめの本 3

燕石(えんせき)

この四月一日から、商品の値段表記が、消費税込みに統一されることになったという。

以前から、小さく「消費税別」と表記された、いわば詐欺まがいの、表記がまかり通っていて、常々不快に思っていた。

売る方からしてみれば、一割安く表記すること
で如何にも「お安い」と思わせたいのだろうが、
私たち金を払う側からすれば、いちいちアタマの
中で0、08を掛けたりするのは面倒な作業でし
かない。

そのくせなにかというと、

「お客様を一番に考えています。」

とか、こころにもないことを言っているから、

「何を、言ってるやがる。」

と小声で言いたくもなってしまうのだ。

しかもこの改正された法律では、「義務化」では
なく、あくまで「任意」だそう。こんなぬるい
条文じゃあいつまでたつても良くなりはいない。
ホント、やれやれというしかありません。

さて、今回紹介する本は二冊。

アン・クラーク・アモール著 角田信恵訳

「オスカー・ワイルドの妻」

—コンスタンス・メアリーの生涯

彩流社

2000・12・25

オスカー・ワイルドといえど童話「幸福な王子」
をはじめとして「ドリアン・グレイの肖像」など数

多くの小説で日本でもよく読まれ、19世紀末英
国を代表する作家・劇作家・書評家のひとりとし
て世界的に知られています。

オスカー・ワイルドはイギリスの名門校を優秀
な成績で卒業しています。

ヨーロッパ各国の作家・芸術家とも数多く親交
がありました。

この本では、オスカー・ワイルドとその祖父、
父母、妻のコンスタンスの祖父母・父母と言った
家族についての記述が多く語られている。

この本の主題は、ワイルドの男色によって、当
時の英国刑法によって服役したこともあり、コン
スタンスが、精神的につらい目にあい、幸せな家
庭生活を送れなかった、ということに尽きると言
えます。

当時の上流階級の男にとつて、同性愛者とバレ
てしまうことは、たいへん不名誉なことであり、
社会的な死をも意味しました。

この時代に、主に英国国教会を始めとする保守
勢力によって、同性愛者に対する刑法が制定され
ています。

(1980年代になってようやく英国刑法が改正
され、同性愛者に対する罰則がなくなるに至りま
した。)

結婚後、いくらかも立たないうちにほかの女性と
浮名を流し、やがては、有名無名の若者多数と性
的関係を結び、妻を省みなくなつたようです。

コンスタンスは、ワイルドとの間に4人の子供
をもつけ、1897年、夫ワイルドに看取られる
ことなく、41年の生涯を終えました。

ワイルドも翌々年、48歳で死去しています。

著者の記述は、余計な引用が多すぎて煩わしく、
非常に読みづらいところが出てきます。

いっぽうで、当時盛んになってきた白黒写真が
多く掲載されてそれによって、美男・美女の夫婦
であったことがわかります。

また、訳者の注記にも時として必要なもの
が多いようです。逆に、注記が必要な文言が見られ
る箇所もあつたりします。

日本についての記述も出てきます。アジアの新
興国・日本の文化に対する、イギリス人の一つの
見方がここから窺うことができて、このあたりは
面白いです。

イギリスの上流階級および社交界の事等は、な
がながしく描く必要はないようにも思えます。そ
の一方では、19世紀末から20世紀初頭にか
けての、イギリスの名門貴族や富裕層の日常生活、
頻繁に行われるパーティーなど、こうしたことを
知らなかった方には格好の入門書になるのかもしれ
ません。

また、ようやく始まるうとしていた「婦人参政
権」についても述べられています。このあたりは
女性史の一つになるでしょう。女性のファッション
についても書かれています。が、コルセットで
無理やり締め付けていた当時のドレスなどには、
コンスタンス夫人は反対だったようです。アメリ
カから発祥した自転車に、乗るためのキュロット
スカートのようなものも紹介されています。

これ等、先駆的な動きに対して、ロンドンの保
守階層からは様々な圧力がかったことは想像に
難くありません。

オスカー・ワイルドの伝記は数多く出されてい
て、今更の観がいなめないとこももあります。オ

スカーがコンスタンスの「財産目当てに結婚した」とする説もあるとも書かれています。

当時の、ヨーロッパにおける上流階級（王侯貴族も含む）のスキヤンダルはそれこそ枚挙にいとまがありません。その多くが、性的なものと、金銭にまつわるものと、です。

遺産の相続やら、詐欺やら、不倫やら、その頃起きたことは、なんら現代と変わるところはないようです。世情を騒がせたロンドンの「切り裂きジャック」という有名な迷宮入り事件もそのころに起きています。

（ロンドンの夜の街に立つ街娼が連続して殺害され、ロンドン市民を震え上がらせた。）

世界一優秀だと言われた、かのロンドン警視庁・「スコットランド・ヤード」も、必死の捜査にもかかわらず、ついに犯人逮捕には至らなかった。

「イギリス王族」が真犯人ではないか、そのため逮捕できなかったのでは、という説もあります。また、娼婦に悪性の性病をうつされて、その復讐の為だったという説もあります。

すべては、霧深きロンドンの闇の中で起きた出来事でした。

二冊目は、

フランソア・カロン著 幸田成友訳

「日本大王国史」

平凡社 東洋文庫 1967・05・10

（訳者の幸田成友は、文豪・幸田露伴の実弟で、巻頭に「フランソア・カロンの生涯」として70ページに亘る年代記を書き記している。）

年譜によれば、1600年にオランダ・ブリュッセルに生まれ、1672年にフランス・リスボン港で海難事故により72歳で没している。

フランソア・カロンは、日本での長年にわたる経験をもとに、

「強き王国日本の正しい記事」

という手紙を残しています。これがこの本の「正しい」題名である。

一九歳の時に、東インド会社の東予艦体の賄方水夫として雇われ、インドネシアに来ることになる。そののち、平戸のオランダ商館に勤め、通訳となる。三代将軍・徳川家光の時代に、オランダ・東インド会社の貿易商として日本を訪れる。やがて、将軍家・大名家にピストル・鉄砲などを献上する。

白砲三門などを献上した際に、老中3名・試射鉄砲方井上何某の前で実射に立ち会う。

※白砲というのは、日露戦争の時、旅順要塞攻略に使われたことで知られる、弓なりの弾道で砲弾を飛ばし、山の裏側などに隠れた敵を狙う大砲の事。

当時は長崎・島原の乱の直後で、原城の攻略に苦戦した幕府は、この新兵器の威力に大いに関心を示したらしい。

江戸幕府の「雇われ外国人」としてインドネシアなどに派遣され、南蛮貿易に従事することになる。

またこのころに、日本人の妻をめとり、七人の子供を設けてもいる。

母国のオランダは軍事力を盾に、スペイン・イギリス・フランスなどの欧米列強とともに東南ア

ジア進出を競っていた時代です。

また、この背景には、キリスト教の新教・旧教間の国をまたいだ勢力争いも、複雑に絡んでいました。西欧のアジアへの植民地政策が盛んだったころの事です。日本ももちろん対象になっていました。

カトリックに改宗したカロンの妻は、キリスト教を禁教としていた徳川幕府によって国外追放される。一方で、ローマ・カトリック教会からは、カロンの正式な妻とは認められてはいません。故に若くして没した彼女の正確な没年もわかっていない。また子供たちのその後も、ほとんど詳しいことは判らなくなっています。子供たちは、出生に当っては、キリスト教の洗礼も受けたはずなのですが、熱病にかかった妻を置き去りにして、母国に帰ってしまったようです。

カロン自身は、後には西洋人の妻をめとり、これは教会から正式に認められたようです。

ともあれ、ずっとあとに、この時代の日本の習俗など（例えば、ハラキリ、はりつけなど）を図版入りで出版して、ヨーロッパに伝えています。

キリシタン禁令を行っていた、江戸幕府のキリスト教徒に対する残虐な迫害の様子を描いています。

また、子供に対しては過ちを犯しても、体罰を加えることはない、とも書いています。

今日の視点で見れば、中には、おやおやと思うものもみられますが、十七世紀当時の日本の事を知る上では、貴重なものの一つと言えるでしょう。

後年、遂には、艦隊の副司令官にまで出世して、インドに派遣されたりもしています。インド洋の島にはカロンの名前の付いたものまであったという事です。

そののち、宗教的理由からか、フランス政府にも接近して、フランス艦隊に乗り組んだりしています。経済的理由で、転職を図ったのだろうか？然しながら、当然、政敵も多くいたようで、晩年はあまりよくはなかったようです。

フランスの港での座礁事故にしても、暗殺だったのかもしれませんが。

巻末には付録として、日本における殉教者の記事が載っています。

インドネシア、或いはタイ王国関係の文章が付けられています。これなどは全くの蛇足といっているでしょう。

二冊とも同じ時代のもので。ヨーロッパと日本。遠く離れた地域が航海術の発達により急激に近づいた時代でもあったわけですね。

茨城県の難読地名とその由来 (15)

木村進

河内【がち】【うご】【うと】

中河内【なかがち】 水戸市
上河内【かみがち】 水戸市
上河内【かみがち】 那珂市
東河内【ひがしうご】 日立市
西河内【にしうご】 常陸太田市

油河内【ゆごうと】 常陸大宮市

もともと「河内」は【かわのうち（川の内）】が↓【かわうち】↓【かわち】（一部ではコウチ）となったものだと考えられますが、茨城県の県北地方に「がち」「ごうど」または「ごうと」と読ませる地名が存在します。

まず水戸市にある「中河内町」なかがちよう、「上河内町」かみがちようですが、この場所は古くは、古代官道が常陸国国府の石岡から台渡里（渡里町）まで真つ直ぐにひかれていましたが、この台渡里に馬を常駐させる駅家（うまや）がありました。そして那珂川（古代は粟川）を挟んで対岸側がこの「河内」地区です。ここにも馬を常駐させておく駅家（うまや）があり、河内駅家（かわちのうまや）が置かれていました。そして何時頃からかこの地は「河内村」と呼ばれていました。

「今昔水戸の地名」（堀口友一著）によると、この「河内村」は「カチ」と呼ばれており、これは「カワチ」の急呼だといえます。カワチをせっかちな水戸っぽが呼んで「カチ」となったというのです。

そしてそれが上、中、下などとわかれ、「上河内」カミガチ、「中河内」ナカガチ」となったものと思われまふ。この上河内町ですが、水戸市にある町ですが、一部が隣の那珂市にもまたがっているところがあります。

一方やはり里川の少し上流地域にも「河内」という地名があり、東側は日立市で「東河内（ひがしごうど）」、西側は常陸太田市で「西河内（にしごうど）」と呼んでいました。

しかし現在は常陸太田市の西河内（にしごうど）との呼称は「西河内（にしごうど）」上町、「西河内（にしごうど）」中町、「西河内（にしごうど）」下町

などと分かれ、一部で市町村合併が繰り返されたため、旧水府村の領域に入っていた「西河内上」は平成の大合併で「河内西（かわちにし）町」と変更になりました。

また常陸大宮市の国道293号線を常陸大宮から北上し、「道の駅みわ」の手前の小舟地区から「やすらぎの里公園」方面に進み、すぐに「油河内川（ゆごうとがわ）」という小舟川の支流があります。この川を西にさかのぼった先に「油河内」と書いて「ゆごうと」と読む地名があります。

「角川日本地名大辞典」によると、河内とは川を中心とした狭い平地を意味し、沢に温湯の湧く所があり、湯河内と名付けられ、後に油河内に改められた。（水府志料）と書かれています。しかし、現在温泉のような施設も見当たりません。河内を「ごうど」「ごうと」と読む由来についてはあまりはっきりしません。ただ「河」は「こう」「ごう」とも読み、「内」も音読みでは「ない」「だい」「ど」とも読むため、「ごうどう」となり、「ごうど」とつまったものではないでしょうか。

奈良時代に書かれた常陸国風土記の久慈郡には、「郡家（旧水府村付近）の西北二十里のところに、河内の里あり、もとは古々の村といった。（ここ）は猿の鳴声からついたといふ。」里の東の山に石の鏡があり、昔、鬼が集まって鏡をもて遊んでいるうちに、鬼は消えてしまった。「恐ろしい鬼も鏡を覗けばおのれを滅ぼす」といふ。その土は、青い色をしていて、良質の絵具として使える。「あをに」とも「かきつに」ともいう。朝廷の仰せで、都に献上している。この里は、久慈河の源にあたる。」とあり、猿の泣き声から「ここ」といい、「古々」となり、それが「河内」に変わったと書かれています。

ます。また参考までに、兵庫県には「染河内（そめこうち）」などと呼ばれる地名もあります。その他茨城県にも「河内村（かわちむら）」などと呼ばれたところは数多くあるようです。いまでも南部には稲敷郡「河内町（かわちまち）」がありますし、昔の真壁郡に「河内村（かわちむら）」（「かつちむら」とも呼ばれる）が存在していました。いまは関城町に組み入れられ、筑西市となり村名は無くなっています。

乙子 【おとこ】 守谷市

乙戸 【おっと】 土浦市

乙の付く地名を集めてみました。
この2件が見つかりましたが、そのほかに阿見町の追原（おっぱら）は昔「乙原」と書いていたようです。

★乙子【おとこ】守谷市

この地名の由来については下記の2つが市の説明などに書かれています。

(一) 平将門伝説で、将門がこの守谷の山に城を築き、万が一の場合に備え、城から抜け穴を掘り、そこから逃げることにしました。その抜け穴の出口を落口（おとしぐち）といいました。それが乙口（おとぐち）に変わり、さらにそれがなまって乙子（おとこ）に変化した。

(二) 万葉集の歌人の大養浄人（いぬかいのきよひと）が、末っ子を非常にかわいがり、成人になっても心配なため、近くのこの地に家を建てて生活させたそうです。昔の人は末っ子を乙子とも言ったので、後に当地区を乙子と呼んだ。

角川日本地名大辞典には、上の(一)の将門伝説の説明がそのまま地名の由来として載っています。が、この2つの説ともに少し根拠に乏しい気がします。

そこで、全国の乙子と名の付く地名を探してみました。

- ・島根県益田市乙子町 おとこちょう
- ・岡山県岡山市東区乙子 おとこ

現在の郵便番号住所簿での地名としてはこれだけです。が、いろいろ調べていくと熱田神宮の末社（社）の中に「乙子社」「乙子神社」があり、やはり「おとこ」と読みます。

また、この乙子社を本社とする神社が各地にあります。

- ・新潟県新潟市中央区沼垂（ぬつたり）東 乙子神社

・・・説明では、乙子神社の乙子とは「末子」という意味で、天照皇大神と彌彦神社の祭神・天香山命（あめのかごやまのみこと）の末っ子である建諸隅命（たけもろずみのみこと）を祀っているとあります。

- ・新潟県燕市国上 乙子神社・草庵

・・・この社務所に良寛が10年間住んだといわれています。

- ・岡山県岡山市東区乙子 乙子神社（乙子城山に鎮座）

・・・ここも祀られている柱の一つである若御毛沼命（わかみけぬのみこと）（後の神武天皇）が、五瀬命（いつせのみこと）＝（安仁神社）の末弟であることから乙子＝末っ子から来ていると説明されています。（長兄が五瀬命で末っ子が若御

毛沼命

しかし、地元の地名の説明には、「波風の静かな児島湾を湖に見立て、潮騒が聞こえる湖から音湖といい、乙子の字を当てた」との説も書かれています。

どうやらこの熱田神宮の末社の「乙子社（おとしや）」が名前の最初のような気がします。

この乙子社は熱田神宮の六末社の最北に建つ神社です。住所は愛知県あま市乙之子（おとのこ）にあります。

祭神は弟彦連（おとひこのむらじ）といい、尾張氏系図に「4世孫として載っています。

これからみると「乙子（おとこ）」は弟彦連（竟平己連（おとごむらじ）ともいう）の「おとこ」から来ているのではないかと感じます。もちろんこの人物も末っ子なのかもしれませんが・・・なお、この「乙子社」は貴船神社との関係が指摘されています。

★乙戸【おっと】土浦市

土浦市に乙戸沼（おっとぬま）があり、その近くの地名が「乙戸」「乙戸南」となっています。またこの沼から「乙戸川（おととがわ）」が流れており、小野川と途中で一緒になり、稲敷（江戸崎）へ流、霞ヶ浦に注いでいます。

「乙戸」の名前の由来としては、はっきりしませんが、昔は、沼の中央の形が「乙」の形であったからといわれています。

現在は乙戸沼公園となっており、卸売市場などの施設もあり、残念ながら形状が乙形かどうかはよくわかりません。

羽生【はにう】【はにゅう】

行方市（旧玉造町）、稲敷市（旧桜川村）、
常総市（旧水海道市）

この羽生はほとんどの人が読めると思いますが、でも最近有名になっている2人、フィギュアスケートの羽生結弦（はにゅう ゆづる）選手と将棋の羽生善治（はぶ よしはる）名人は何故、同じ字なのに読み方が違うのだらうと気になっていませんか？行方市の霞ヶ浦湖岸にある「羽生」は「はにゅう」と読みます。また近くに「橘郷造神社（たちばなごうぞうじんじや）」という神社があり、ここにヤマトタケルが東京湾を渡るときに波を鎮めるために入水した「弟橘姫（おとたちばなひめ）」がまつられており、次のような伝説があります。「弟橘姫のさしていた筭（こうがい）が、霞ヶ浦に流され、この羽生地区に打ち上げられました。流れついた筭を守るかのように鳥が群がり、その筭はこの神社まで、羽を生やして飛んだ、または鳥がくわえて運んだ。そのため、この地区の名前を「羽生」といい、この地区が「立花」とついたらとも言われています。」筭（こうがい）とは、昔女性が髪にさしていた櫛の一種です。「角川日本地名大辞典」によると、羽生（はにう）は先に紹介した3か所が出てきますが、地名の由来はこの旧玉造町のヤマトタケル伝説のある「羽生」について、「地名は、埴輪の産地にちなむという」と書かれています。もう少し全国の地名を調べてみましょう、

★「はにう」という読み

・新潟県佐渡市羽二生（はにう）

★「はにゅう」という読み

- ・宮城県伊具郡丸森町羽入（はにゅう）
- ・宮城県黒川郡大郷町羽生（はにゅう）
- ・山形県東根市羽入（はにゅう）
- ・茨城県常総市羽生町（はにゅうまち）
- ・茨城県稲敷市羽生（はにゅう）
- ・茨城県行方市羽生（はにゅう）
- ・栃木県下都賀郡壬生町羽生田（たにゅうだ）
- ・埼玉県羽生市（はにゅうし）
- ・新潟県糸魚川市羽生（はにゅう）
- ・新潟県南蒲原郡田上町羽生田（はにゅうだ）
- ・富山県小矢部市埴生（はにゅう）
- ・富山県下新川郡朝日町山崎（羽入）（はにゅう）
- ・石川県鳳珠郡能登町羽生（はにゅう）
- ・岐阜県可児市羽生ヶ丘（はにゅうがおか）
- ・岐阜県加茂郡富加町羽生（はにゅう）
- ・大阪府羽曳野市埴生野（はにゅうの）
- ・兵庫県豊岡市竹野町羽入（はにゅう）
- ・島根県松江市八束町波入（はにゅう）

★「はぶ」という読み

- ・高知県四万十市中村羽生小路（はぶしょうじ）（その他のハブ地名）
- ・東京都大島町波浮港（はぶみなと）
- ・富山県南砺市土生（はぶ）
- ・静岡県焼津市飯淵（はぶち）
- ・愛知県豊田市羽布町（はぶちよう）
- ・京都府南丹市園部町埴生（はぶ）
- ・大阪府岸和田市土生滝町（はぶたきちよう）
- ・大阪府岸和田市土生町（はぶちよう）
- ・兵庫県朝来市羽瀨（はぶち）
- ・兵庫県美方郡香美町香住区土生（はぶ）
- ・和歌山県岩出市波分（はぶ）

- ・和歌山県有田郡有田川町土生（はぶ）
 - ・和歌山県日高郡日高川町土生（はぶ）
 - ・和歌山県東牟婁郡串本町吐生（はぶ）
 - ・岡山県苫田郡鏡野町土生（はぶ）
 - ・広島県尾道市因島土生町（はぶちよう）
 - ・広島県府中市土生町（はぶちよう）
 - ・山口県岩国市土生（はぶ）
 - ・山口県山陽小野田市埴生（はぶ）
 - ・愛媛県松山市西垣生町、東垣生町（はぶまち）
 - ・愛媛県新居浜市垣生（はぶ）
 - ・愛媛県西予市三瓶町垣生（はぶ）
 - ・愛媛県越智郡上島町弓削土生（はぶ）
 - ・福岡県中間市垣生（はぶ）
- ハブ地名には「土生」「垣生」「埴生」という地名がたくさん出てきます。

「埴生の宿（はにゅうのやど）」という歌は多くの方がご存知だと思いますが、この「埴生（はにゅう）の宿」とは、床も畳もなく「埴（土＝粘土）を剥き出しのままの家のこと（日本童謡事典）と書かれています。また「埴生」は、粘土性の土の意だと国語辞書に書かれています。

すなわち「羽生」地名の元となるのはこの「埴生」
Ⅱ粘土性の土を意味し、そのような土が取れる場所に名づけられた場所だといえそうです。「埴（はに）Ⅱ土」＋「生（う）」ⅡあるところⅡ場所という意味になりそうです。
また羽生を「ハブ」と読むの事例は数が少ないのですが、「ハニウ」が省略されて「ハブ」になったと解釈できます。

また粘土ということではなく耕作できる土を「埴」と解釈すると、「埴生」「羽生」などは、耕作するのに適した場所という意味になります。羽生田、

羽入田などはその例ではないかと思えます。

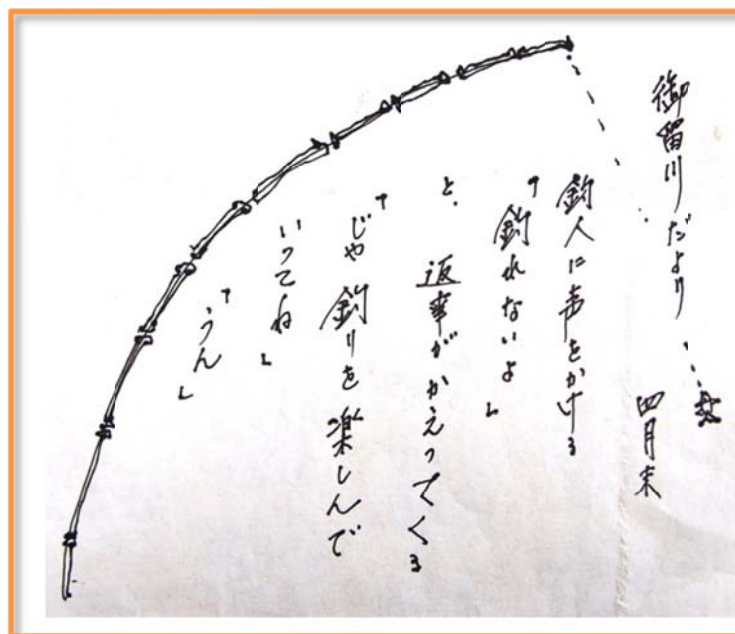
この「埴」を焼き物の粘土に使える土と解釈すると、埴輪、素焼器、焼物、などに適した土が採れる場所となります。この焼き物を焼く人が、「植師（はにし）」であり、「土師（はじ）」です。この「埴生」とほとんど同じように使われているのが「丹生（にう）」という地名です。ただ、「丹（に）」とは赤色の顔料に使える土のことです。

★「にう」のつく地名

- ・北海道勇払郡占冠村（ににう）
- ・北海道中川郡美深町仁宇布（にうぶ）
- ・秋田県北秋田市阿仁打当（にうつつう）
- ・福島県郡山市西田町鬼生田（おにうた）
- ・三重県多気郡多気町丹生（にう）
- ・兵庫県美方郡香美町香住区丹生地（にうじ）
- ・奈良県高市郡高取町丹生谷（にうだに）
- ・奈良県吉野郡下市町丹生（にう）
- ・和歌山県有田郡有田川町丹生（にう）
- ・徳島県那賀郡那賀町小仁宇（こにう）
- ・徳島県那賀郡那賀町仁宇（にう）
- ・熊本県熊本市南区城南町丹生宮（にうのみや）



【御留川（おとめがわ）便り】 伊東弓子



常陸旧地考（12）

下巻（五）

菊地孝夫

○鴨大神御子神主神社
神名帳に新治郡三座小二座、鴨大神御子神主神社あり。小社なり。
さて、いま茨城郡加茂部村の鎮守神この神社なりという。

この加茂部村を今羽黒という。国郡図には加茂部と有りその頃まではそのように云いしなるべし。

はぐろは、ここにある大寺の羽黒山というのを村（名）に呼びつづけて、いつしか村名の如くなりたり。

文徳実録に嘉祥三年（850）六月己酉、常陸國鴨大神、御子神主神を以て官社となす、云々。

國誌に清原宣賢が神代紀鈔を考えるに、下賀茂は御祖神、これ大巳貴命なり。上賀茂は別雷神、これ大巳貴命の子、初め大巳貴あらため丹箭を為し、民家の簷に止まる。部屋に女有り、感じて孕む。其のところで為した子なり。別雷神なりというのは、即ちこの所謂、御子神はあるいは、別雷神をさすなり、云々。

神名帳に、山城国愛宕郡加茂別雷神社、加茂御祖神社あり

*…丹箭を為し…朱塗りの弓での狩りの事だろうか？

*…簷…軒

○佐志能神社 さしの
神名帳に新治郡三座小二座佐志能神社あり。小社なり。

續後記に承和四年（837）三月戊子常陸国新治郡佐志能神社云々並官社なす。このころとくに靈驗を以てなりとみえる。さてこの神社を、今の新治郡の染谷村の龍神をこれなりという、また同郡高友村の鎮守白鳥明神をこれなりという。いずれならん、確かなる証拠もなければ、定めがたし。國誌にも財新治郡とのみにて、その地を記さねば、詳らかならず。

社伝に、双方とも祭神日本武尊と言ひ伝う。これによれば、高友村の白鳥神社の方縁ありげなり。

日本武尊白鳥になり給いし事、御陵を白鳥陵といえはなり。しかれど、社号のみにて、つまびらかならず。さだめがたし。なお、佐志能神社のことは考有り、村上神社の条に云うべし。

ある説に笠間の佐白山もと佐志山にて佐志神の鎮まりまし地なり。今は神の名も聞こえず、観音という佛の山となれり。

この笠間は風土記に、新治郡にあり云々。これによりてかんがうるに、風土記新治郡の条に、郡より東五十里笠間村在り。越通し道を称して葦穂山云々とあり。鴨部稲田より笠間あたりまでかけて古くは新治郡なり。されば、この佐白山即ち佐志山にて、佐志神社の山なのを、観音という仏を安置してより、仏の名のみ高く成りて、何時しか神野八代は廢れて山の名も、さし、をさしると訛り、ついに文字をも佐白と書き換えしなるべし。また神の山の佛の山となりしは、大和の長谷、山城の比叡の類なり。

○夷針神社

神名帳に茨城郡三座、小並、夷針神社あり。

この神号古く、イハリと読み来れども、古事記伝に伊自牟国造の条に和名鈔に常陸国茨城郡夷針郷あり、(延喜)式に同郡夷針神社あり。これらも伊自牟と読む。この説よく謂われあり。地名に音訓交え用いるは大方無い。夷は音なり。針をハリと読むは訓なり。ゆえにイジムと決定。

さて夷針は音なのを、イジムと言える地名の仮字に用いたるなり。

さてこの神社を、いま茨城郡大戸村の鎮守神をこれなりと言うのはいかがか。国誌にその地を記さざるは、その頃早く廢れて知られなくなった(た

め)。

いま按ずるに、茨城郡に泉村ありこれ、和名鈔に茨城郡夷針郷とある。これにてすなわち、夷針神社ここなるべし。さて泉村の鎮守神は天皇宮というのを祭り、いと古き社にて今の世の御朱印という物もあり。また愛宕権現社有り。これにも御朱印ありといえどこれはいと後の事なりという。神名帳に出雲国出雲郡伊甚神社有、また同国風土記に出雲郡伊自美神社有。和名鈔に上総国夷讃郡あり。

○羽梨山神社

神名帳に茨城郡三座、小並羽梨山神社あり。三代実録に貞觀三年(862)八月二十八日戊申常陸國從五位下羽梨神從五位上を授く。

また仁和元年(885)九月七日戊子常陸國從五位下羽梨神正五位下を授くと見えたり。

今茨城郡の岩間村の鎮守神をこの神社なりと云う。岩間村は和名鈔に茨城郡石間郷とあればさもあらむか。されど國誌に在茨城郡とのみ記してその地を挙げねば、その頃早く廢れて知られなくなった。

○主石神社 めしいは

神名帳に茨城郡三座、小並主石神社あり。

文徳実録に嘉祥三年(850)六月己酉詔常陸主玉神以て官社に列す。

三代実録に貞觀三年(861)九月二十三日甲午常陸國從五位下主玉神從五位上を授く、と見えたり。これに

主玉とあるは、誤字か神名帳の方の誤りか、いずれか定かならず。

いまの世に鹿島郡の、大和田村の鎮守神この神社

なりという。この大和田村は茨城郡に近けれど國誌に在茨城郡とのみ記してその地を挙げねば、必ずこれとも定めがたい。

○佐波波地祇神社 さははちうえつかみ

神名帳に多賀郡一座小佐波波地祇神社あり。

三代実録に貞觀元年(859)四月二十六日辛亥常陸國正六位上佐波神從五位下を授く、と。

いまの世に多賀郡大津村の鎮守神をこの神なりといえう。されど、國誌に多珂郡とのみにてその地を記さねば今確かには定めがたし

上の件の神社は、延喜式神名帳に載せられしところの官社なり。里人の二十八社これなり。

○三枝祇神 さいくさうえつかみ

三代実録に貞觀十七年(875)十二月二十七日丁丑常陸國正六位上三枝祇神從五位下を授く、と見えたり。今在る地を知らず。國誌に「今不知其在所」と見える。早くに廢れて知られずか。

○河江神

三代実録元慶元年(877)六月二十八日丁酉常陸國正六位上河江神從五位下を授く、と見えたり。今ある地を知らず。國誌に「今不知其在所」とあり、これも早くに廢れたものとみえる。

○於伎都説神 おきつせ

三代実録に仁和元年(885)三月十日乙丑、常陸國正六位上、於岐都説神に從五位下を授く、と見えたり。鹿嶋郡の息栖村の息栖明神これなるべし。

國誌に今在る地を知らずとあるは、尋ね漏らしな

るべし。

宝亀八年（777）七月乙丑、内大臣従二位藤原朝臣良繼、病む。氏神は鹿嶋社正三位

【豆知識】

◎ 日米和親条約裏話 木村 進

江戸時代末期に日本に訪れた黒船。江戸幕府は1639年に鎖国を開始してからは長崎出島のみを開港しておりました。ここでの貿易相手はポルトガル、オランダ、中国などであり、蘭学（オランダ語）が中心でした。政府が正式にこの外国人との間で話す場合には、今でいう通訳がおりました。公式の通訳は職業として政府により任命された者だけが許されるのですが、この職の人を通詞（つうじ）と呼びますが、この通詞は身分としても結構高く、それも親から子へ代々引き継がれていたりしていたようです。しかし、シーボルトが伊能忠敬の地図など持ち出そうとした事件などでも数名の通詞が連座となり処罰を受け、また薩摩藩の密貿易（沖合いで荷物を直接取引）などで、磔刑となつた通詞もいました。さて、この鎖国が実質的な

終わりを告げるのは、嘉永7年（1854年）ペ

リーと交わした「神奈川条約（日米和親条約）」が締結されたこととなりますが、この交渉時にどのような様子であつたのかは、日本側にはあまり残された文書が無く、交渉にあつたアメリカなどの日記などに記されています。ペリー艦隊が帰国後、ペリーの日記を編纂して『ペリー艦隊 日本遠

征記』を書いて残していますが、この中で条約締結直後に、黒船（ポーハタン号）の甲板では盛大なパーティが催され、当時の様子を次のように書いています。

『日が暮れると、日本人は飲めるだけの酒をしたたか飲んで、退艦の用意にかかった。陽気な松崎（満太郎）は両手をペリー提督の首にまわし、よろよろしながら抱きしめ提督の新しい肩章を押しつぶしながら、涙ながらに日本語で「Nippon and America, all the same heart」（日米、同心、日本とアメリカ心は一つ）という意味の言葉を繰り返した』とあり、また、ペリーの日記には松崎に抱きつかれたペリーは条約に署名してくれたら「キスをしても良い」とまで言つたとある。日本側の主席通詞は堀達之助だったようで、当時英語、ロシア語なども勉強させられていたようだが、黒船に向かって「I can speak Dutch. とだけ英語で叫び、日本側の得意とするオランダ語を土俵とする交渉に引き込んだといわれている。

【特別企画】

打田昇三の太平記（10） 巻第五 1

商品の製造又は販売元が「〇〇本舗」「元祖▽▽」などの看板を出しているけれども、其れは支店に対する本舗（店）の誇示だけでは無く創業を意味するものだとして勝手に解釈をしている。客の立場で言わせて貰えば、材料や製造過程が明らかで売る品物が良くて程々の値段であれば、店の由緒・経

歴は余り意味が無いようにも思うのだが：

国家の歴史も同じであり建国以来の出来事が嘘偽り無く伝えられていけば国民も尊重するのであるけれども、我が大日本帝国は其の草創期から都合の悪いことは全て神様の所為にする荒唐無稽な話を創作し、延々と国民を騙し続けてきたから、観光地土産に例えれば包装は立派だが中身がお粗末な商品（国）であつた：ということになる。

それに加えて、皇族同士の醜い権力争いも頻繁であり、保元元年（一一五六）には第七十五代の崇徳天皇（上皇）が讃岐国の山中に幽閉された。

恨みに燃えた上皇は天災・飢饉・動乱などを惹き起して（実際には自然災害だと思ふのだが）鬱憤を晴らした——慌てた政府は京都に白峯宮を建立し上皇に崇徳院の号を送つて鎮魂に努めた。石岡でも金刀比羅神社に崇徳天皇が祀られている。

保元年間から凡そ百八十年、天皇の権威は確立されたかに見えたのだが現職の後醍醐天皇が逮捕され刑務所に送られる：と言う出来事が起きた。その騒ぎを伝える太平記に「天地開闢（てんちかいびやく）以来、斯かる不思議を聞かず」と書いてあるけれども、天皇も庶民も人間に変わりは無いので一生の間に予期しない不幸が有っても致し方はない。敢えて言わせて頂けば、物語として太平記の魅力は其の辺に有るのかも知れない。

○持明院殿御即位の事

太平記も巻第五に入る。元弘二年（一一三二）三月二十二日に、後伏見天皇の第一皇子・量仁親王が十九歳で即位した。北朝第一代の光厳天皇であり現代の天皇家は此の系統になる。南でも北でも国民には全く関係は無いが、天皇の枠は限られ

ており待遇が違うから争奪競争が激しくなるのである。後醍醐天皇も会社倒産後に再起を図り脱走して活動を開始した為に、大日本帝国の歴史は土産店などの本舗争い同様に混乱をしたのである。光厳天皇の母親は、竹林院と呼ばれた左大臣藤原公衡（きみひら）の娘である。天皇は同じ年の十月二十八日に河原でお祓いをして、十一月十三日には大嘗会（だいじょうえい即位の儀式）をするなど忙しかった。当時の関白は鷹司左大臣冬教公、秘書官長は日野中納言である。後醍醐天皇時代に芽が出なかった連中が急に出世して門前市を成し堂上花の如き有り様となった。特に光厳天皇の父親である後伏見天皇に繋がる者たちの出世が著しかったと言われる。浅ましいことである。

○宣房卿二君奉公の事

萬里小路大納言宣房卿は、元来が前の朝廷（南朝・後醍醐天皇系）の寵臣であった上に、息子の藤房・季房兄弟が笠置城で捕らえられ島流しの刑に処されているので父親も処罰の対象にはなるのだが、公卿としての能力が高く評価されていた為に北朝朝廷も幕府も特別に罪を許すこととなり、日野中納言が勅使となつて其の旨を伝えた。

是を聞いた宣房は心の中で「勝手なことを言いやがる！」と思つたが、勅使には丁寧な答えた。

「臣（宣房）不肖ながらも多年奉公の労を以て君（天皇）の恩により官位・封禄を進められ、其の上に政治に関わつてきた。天皇にお仕えするにももし天皇に誤りがあれば道理を以て諫め、三度諫めて容れられなければ身を引く、匡正の忠有つて阿順の従無し、是が忠臣の節であり、諫めるべき時に諫めないのを尸位（しいい才徳が無く、高位

に居て職責を果たせない者）と言ひ、また退く時に退かない者を懷寵（かいちよう）と言う。懷寵尸位は国の奸人である。

後醍醐天皇は過激な行動を起こして武士に捕らえられ恥辱を受けて居られる。其の経緯は私の知らない所で起こつたので止め様が無かつたけれども二人の子が流罪に処せられているから世間の人は天皇側近としての私の責任を咎めるであろう。

更に私も高齢であり職務が果たせない。二君に仕えて恥を晒すよりも伯夷（はくいい古代中国の賢人・清廉潔白の例え）に学んで世を忍ぼうと思ふが、どうであろうか？」と感慨深く答えた。

日野中納言も其の言葉に打たれて暫くは返答も出来ずに居たけれども此の俣では帰れない。意を決して「忠臣は必ずしも主を選ばず、仕えて治むべきを見るのみ」と申します。それゆえに百里奚（はくりけい古代中国・秦の名将）は二度の奉仕で勲功を表わし、管夷吾（かんいご王族出身の武将）は二度目の就職で斎（BC三百年代）の桓公を援け諸侯の重職を歴任しました。其の故事に倣つて新政府も過ぎた事を問わず、大納言殿をお迎えしたいと思つているのですから、お二人の御息も折りを見て赦免をされる筈です。どうか是からのことをお考え下さい」と言葉を尽くして大納言を説得したのである。結局、萬里小路宣房は日野中納言の熱意に負けて、嫌々ながらも南朝から北朝へと転職することになった。

○中堂の新常燈、消える事

常燈つまり常夜燈でも節電対策などで消されることあるから特に記録する程の話では無いが、是は比叡山延暦寺で灯（ともし）続けていた燈明

が野生動物の闖入により一時的に消された―其れを当時の人々が異常な出来事と捉えたくだらな話である。其の前提として、権威にしがみつく愚かな支配者に苦しめられながら当時の物騒な社会に生きた庶民の底知れぬ不安が見えてくる。

その頃、京の都と其の近辺では、今までに聞いたことの無い不思議な出来事が起きていた。例えば比叡山延暦寺の根本中堂では、内陣に二羽（つがい）の山鳩が飛んで来て、常夜灯の油壺に入り込み暴れたから堂内が停電となり、山鳩のほうも闇に迷つて仏壇の上で翼を休めているところへ、赤毛の鼯（いたち）が現れて二羽ともに喰ひ殺し、何処かへ消えていった。

此の常夜灯は、先の天皇（後醍醐天皇）が比叡山に臨幸された際に、その昔、桓武天皇が為されたように、自ら百二十筋の燈芯を束ね銀の油壺に油を入れてから灯された燈明である。此の事は偏（ひとえ）に皇統の無窮を輝かさん為の御願であり（国民の為では無い）兼ねては六趣の群類（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）各界の冥暗を照らす光（法灯）であることに擬えて（なぞらえて）置かれた常夜灯であるから、未来永劫に至るまで消えることの無い（消すことの出来ない）法灯であつたのに山鳩に消されてしまった。さらに其の山鳩を鼯（いたち）が喰ひ殺してしまふ：原本では「不思議也」と何度も言っているが、動物の世界は「弱肉強食」が日常のことであろうから、鳩には気の毒だが不思議でも何でも無い。

○相模入道、田楽を弄ぶ事並びに闘犬の事

田楽豆腐という食べ物があるけれども、此の場合の「田楽（でんがく）」とは、平安時代から行な

われた農耕儀礼に始まる古典芸能の一つであり、笛・腰鼓・銅鑼・ささら（割り揃えた竹）などの伴奏で歌い踊ったものが最初で、鎌倉時代から南北朝時代にかけては能楽と合わせて盛んになった芸能らしい。闘犬は読んで字の如く犬の喧嘩であるが、最初は「大合わせ」と言ったようで、人間が闘わせたのであるから良い趣味では無い。記録として出てくるのは「太平記」が最初らしい。

本文に入ると、其の頃、京都では田楽遊びが行っていて貴族・金持ちから一般庶民まで是に熱中していた。鎌倉で其の事を聞いた相模入道（北条高時）は、京都に遅れをとってはならないとばかりに田楽狂いを始めたのである。原文には「…新座本座の田楽を呼び下して日夜朝暮に弄ぶこと他事無し…」とあるから、政務を放り出して諸国の芸人を呼び集めたのであろう。道楽も自分の範圍で熱中している分には勝手だが、出来不出来は兎も角、内閣総理大臣で有る人物が政務を放棄して遊興に没頭したのでは国家が成り立たない。

北条高時は幕府に服従した大名たちに田楽屋を一人ずつ付けてその華美を競わせた。その為に舞台では「是は〇〇殿の田楽、彼は▽▽殿の田楽…」などと評価され、武士に有るまじき競合が展開されるようになった。田楽の発表会では一曲が終わる毎に相模入道以下の一族大名たちが、出演者に褒美として豪華な衣装を与えたりしたから其の為の費用は膨大な額に上ったのである。

或る時に、酔った相模入道が飛び入りで下手な舞いを図々しくも披露していたところ、何処から現れたのか諸流義・各派の田楽屋十余人が座に連なつて舞い謡い始めた。然も其の演技が素人の域を越えていたのである。やがて其の者たちが拍子

を変えて歌い出した。その歌が「…天王寺の妖霊星を見ばや…」と聞こえたので、偶然に近くに居た女官が興味を持つて障子の隙間から覗いて見ると田楽芸人では無く、相模入道の周りに嘴（くちばし）の尖った男、背に翼をつけた男などの化物が山伏姿に変じ出演して居たのである。

女官は恐怖心より先に不思議さに驚き、近くに居た者と呼んで入道の近臣である安達時頼に報告させた。駆け付けた時頼が太刀を持って室内に入ると怪しい山伏は消え去り、相模入道だけが前後不覚に酔い臥していた。周囲の量には得体の知れない動物の足跡が残されている。暫くして相模入道が目覚めましたけれども、暫くは呆然とした様子で何を聞いても記憶には無かった。

後日、藤原系の儒学者・刑部少輔仲範と言う者が此の話を聞き「天下が将に乱れん時、妖霊星と言う悪星が天降つて災いを成すと言う。其の妖怪が天王寺の妖霊星と歌つたのは正に天王寺辺りから天下の動乱が起り国家が滅亡の危機を迎える予兆であらう。天皇を始め、公家や武家などは心して民主主義的な政治を行わなくてはならない」と言つたらしいが、日本が民主主義を知るのは六百年も後になる。馬鹿な政治の六百年は長い。

相模入道こと北条高時は妖怪に騙されても懲りる事無く、贅沢三昧、犬道楽に精を出して諸国から税を集めて名（迷）犬を募り、数百匹の犬を闘わせるなど狂気の沙汰を繰り返していた。心ある人々は其の愚行を忌々しく思ったが、相手が將軍であるから嘆くことしか出来ない。

○時政、江ノ島に参籠の事

原本には「時已（すで）に澆季（ぎょうき）に

及んで、武家天下の権を執る事、源平両家の間に落ちて、度々に及べり…」とある。澆季に及ぶとは、道徳が衰えて人情が軽薄になることらしい。天道は必ず満ち欠けが有るので、人間の権力も或いは一代で滅び、或いは一代も持たずに消えることがある。今、鎌倉の北条氏は源氏滅亡の後を受けて天下に君臨すること既に九代となった。伊豆の武士に過ぎ無かった北条氏が権力を手にするに至つた経緯については、科学的根拠は無いが、それなりの理由がある。

鎌倉幕府の草創期、北条四郎時政（頼朝夫人・政子の父）が、弁財天などを祀る江の島に参籠して子孫の繁栄を祈願した。満願に当る二十一日目の夜に容姿端麗な美女が赤い袴に柳葉色の着物姿で時政の前に現れ、次のように告げた。

「汝・時政の前世は箱根山の法師である。その法師が六十六部の法華経を書き写して諸国六十六か所の靈地に奉納した善根により、再び此の世に生きることを得たのである。北条氏の子孫は永く日本の主となつて此の世の榮華を誇るであらう。ただし、其の行いに過失があれば七代を過ぎず滅びる。もし私の言葉に不審があれば諸国の靈地を確かめて見よ！」言い終わると美女は忽ち六〇メートル程の大蛇になつて海中に消えていった。

跡には大きな鱗（うろこ）が三枚、落ちていたもので、時政は祈願成就の証拠として其の鱗を旗の紋にし、諸国の靈地に「大法師時政」の名で法華経を奉納した。それから七代を過ぎて北条氏も九代になり当代・高時に専横の振る舞いが目立つようになつた。滅ぶべき時期が到来したのである。

続く